

越後の植物観察記(その2)

木村 彰

文中[]内は1:50,000図金井式メッシュと環境庁メッシュであるが、前者は測地系をJGD2000に改定後のものを当てているが、後者は旧Tokyo測地系のままであるので、一部該当する地形図に差異があることをお断りしておく。

I 帰化種

○モミジバヒメオドリコソウ *Lamium hybridum* Vill. (しそ科) [写真1]

新発田市五十公野公園20m: 木村彰 (2004. IS-402764) [新発田392376-23, 5639-72-29]

遊歩道の一角に数株が開花していた。イチビと混生しており、どこかから土が持ち込まれた可能性があると思われる。個体数は少なかったが、観察したのが昨年(2003)の10月31日と本来の花期と異なる時期であるので、まだ他にも生育している可能性もある。

近年全国的に広がりつつある種だけに県内においても今後の分布の拡大状況について留意する必要があるだろう。

○イヌコハコベ *Stellaria pallida* (Dumort.) Piré (なでしこ科) [写真2]

新潟市学校町通2m [新潟391376-12, 5639-60-93]

新潟市上所2m [新潟391376-12, 5639-60-83]

新潟市石山1m [新潟391376-22, 5639-60-77]

新潟市(当時新津市)金津・新潟県立植物園構内7m [新潟391375-23, 5639-50-09]

路傍の植込みや公園の草地、アスファルトやコンクリートの隙間などコハコベと同様の場所に生え、実際によく混生するので、よく注意しないと気付かない。昨年、新潟県立植物園でも情報を収集していただいたが、あまり報告は集まらなかったとのことである。見落とされているだけで既に県内にもかなり広く侵入していると思われるが、まだ郊外では見ておらず、ミチタネツケバナほど広がってはいないのではなかろうか。今後も分布の拡大状況について留意する必要があると思われる。写真は2004年4月3日、新潟市学校町通で撮影。

○トゲミノキツネノボタン *Ranunculus muricatus* L. (きんぼうげ科) [写真3]

上越市稲田10m [高田東部382371-13, 5538-52-31, 32]

農林水産技術会議事務局農林水産研究センターに開設された「帰化植物メーリング・リスト(以下単にMLという)」というものがあり、帰化植物についての情報交換が行われている。ここで、MLの管理者でもある(独)農業・生物系特定産業技術研究機構 中央農業総合研究センター北陸研究センターの森田弘彦氏が、同センター敷地内にトゲミノキツネノボタンが帰化していることを紹介された(2004年4月7日付)。早速現地を訪ねてみると、周辺の圃場にも非常に多数の個体が観察できた。写真は2004年4月11日撮影。当地への侵入経路は不明とのことである。

なお、上記MLに興味のある方はnaturplant-admin@ml.affrc.go.jpまでご連絡願いたい。

II 在来種

○マルバノサウトウガラシ *Deinostema adenocaulon* (Maxim.) T. Yamaz. (ごまのはぐさ科 県:絶滅危惧Ⅰ) [写真4]

聖籠町蓮濁7m [新発田392376-14, 5639-72-81]

休耕田にサウトウガラシ、ウリカワ、オモダカ、コナギ、キクモ、キカシグサ、アゼナ類などと混生していたが、個体数は多くない。写真は2004年9月4日撮影。

○アブノメ *Dopatrium junceum* (Roxb.) Buch.-Ham. ex Benth. (ごまのはぐさ科 県:絶滅危惧Ⅱ) [写真5]

新潟市木場1m [新潟391376-11, 5639-50-90]

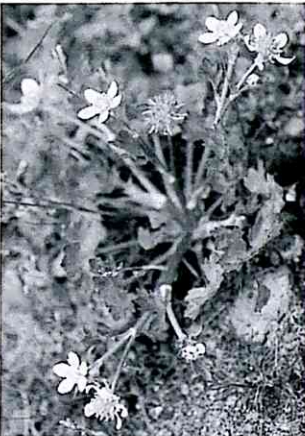
写真は2004年9月11日撮影。耕作田の周辺部に額縁状に設けられた作付調整部に群生していた。



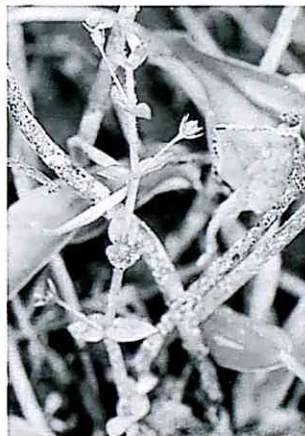
【写真 1】 モミジバヒメオドリコソウ



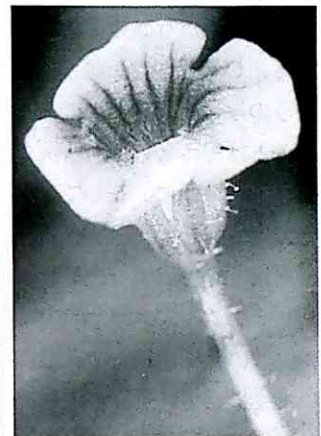
【写真 2】 イヌコハコベ



【写真 3】 トゲミノキツネノボタン



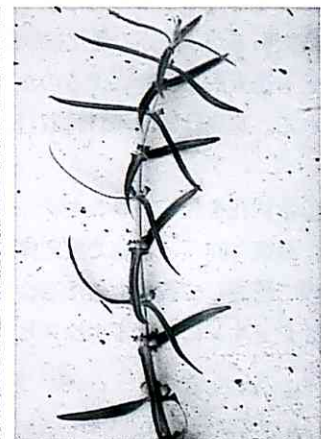
【写真 4】 マルバノサウトウガラシ



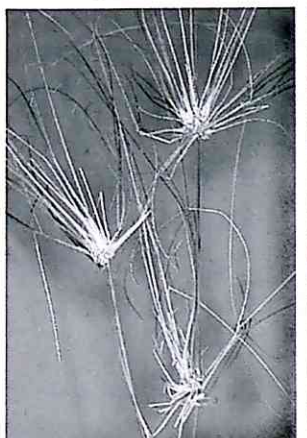
【写真 5】 アブノメ



【写真 6】 宮池の植物：タコノアシ、マツカサススキ、ホソバヒメミソハギ



【写真 7】 5月のススキ



【写真 8】 節から芽を出すシナダレスズメガヤ



【写真 9】 坊主ノコンギク

○宮池の植物

[写真6]

新潟市木場2m [新津391375-14, 5639-50-90]

新潟市金巻と木場の境に小さな池がある。地図ではその名は明示されていないが、『黒埼町史』によると宮池又は木場池とある。ここは釣人が訪れるためか、近年、駐車場の整備が行われ、池に通じる水路もきれいに整備された。整備後の水路には、多数のヌマガヤツリ *Cyperus glomeratus* L.が発生し、以前は見られなかったタコノアシ *Penthorum chinense* Purshやマツカサススキ *Scirpus mitsukurianus* Makinoが見られるようになった。これらは、いずれも旧黒埼町の植物目録(松井、1994)には記録されていなかったものであり、埋土種子によるものなのか、工事移入によるものなのか、気になるところである。なお、帰化種のホソバヒメミソハギ *Ammannia coccinea* Rottb.も少数見られた。写真は2004年9月25日撮影。

Ⅲ 雑 録

○5月に咲くススキ *Miscanthus sinensis* Andersson

[写真7]

ここ数年、新潟市内では5月からススキの出穂を見かける。西日本ではワセオバナが咲いたのをススキと誤認して新聞紙面を飾ることがしばしばあるとのことであるが、新潟市にはワセオバナの自生はない。5月咲きは同じ場所で経年見られることから何かしら理由があつてのことと思われるが、春咲きの種が秋に返り咲くことはよくあつても、秋咲きの種が春に咲くというのはどうした理由であろうか。しかも、ススキのような大型種が春先からの僅かな期間で開花にいたるエネルギーを蓄えるとは思えない。昨秋咲くべき花芽が越冬するのであろうか。写真は2004年5月30日、新潟市上所での撮影であるが、この前の週には既に開花していたものである。ススキに何が起つているのであろうか。

○節から芽を出すシナダレスズメガヤ *Eragrostis curvula* (Schrad.) Nees

[写真8]

シナダレスズメガヤの中に花茎の節々から「芽」を出しているものを見かける。「芽」は節の3~4mm上の部位から輪生状に発生し、1つの花茎に複数段つくものもある。基部には発根も見られるが、晩秋まで花茎に付いたままで脱落せず、そのまま枯れていることから繁殖の役に立つのかどうか不明である。中にはこうした「芽」からも花茎を立てているものもある。以前に同じ場所で経年発生しているのを見ているが、同じ個体かどうかまでは確認していない。文載では長田イネ科図鑑などにはこうした記述はなく、わずかに『神奈川県植物誌1988』に「花穂の節から肉芽を生じるタイプもある」とある程度であるが、前述の帰化植物MLによると各地から採集例があるという。「芽」が生じる理由は何か、固定した性質なのかそれとも後天的な条件によるのか、いつ頃から生じるのか、繁殖の用には立つのか、不明なことばかりで観察不足を反省させられる。写真は2004年11月27日、新潟市(当時新津市)古津産のもの。

○舌状花を欠くノコンギク *Aster ovatus* (Franch. et Savat.) Mot. Ito et Soejima

[写真9]

最後に昨年、本誌で渡辺洋子氏が舌状花のないノコンギクを紹介しておられた。過去に新潟市でも同様のものを見ているので紹介しておく。ただし、こちらでは同一個体に舌状花のない花と舌状花のある花が混じって咲いているものもあり、ヒメジョオンにおけるボウズヒメジョオンで見られるようにキメラになっているのであろうと推測していた記憶がある。

[文 献]

- 松井 浩 (1994) 黒埼町の植物目録 黒埼町史資料編5自然 黒埼町
 神奈川県植物誌調査会・神奈川県立博物館 (1988) 神奈川県植物誌1988 神奈川県植物誌調査会・神奈川県立博物館
 渡辺洋子 (2003) 佐渡島における植物観察記録2 新津植物資料室年報2003 積雪地域植物研究所(新津植物資料室)
 帰化植物メーリング・リスト (2002~)